

2010年(平成22年)12月22日(水曜日) (1)

秋 春 毎 交

一向に景気の回復感がない中で、今年も暮れていく。せめて憂さを忘れて来る年に希望をつなぎたい。そんな思いで帳(とほり)の降りた街でささやかに忘年会が催されている。「飲んだら乗るな」は言うに及ばないが、年末の交通事故防止運動の期間中だ。飲酒運転など言語道断であることは承知のうえだが、気が緩むのも飲酒の特徴のひとつだ。「分か

っているよ」と聞こえてきそうだが、まだ飲酒運転の事案が後を絶たない。飲酒運転根絶に血眼になっている関係者の努力を踏みにじる行為だ。

大阪ヘルスケアネットワーク普及推進機構は、自ら作成している「健康管理で事故防止ポスター」で残酒対策を訴えている。アルコール5%のビール35

残酒で酒気帯び

長時間要す酒気抜け

ではなぜこんな事案が統発するのか。実は飲酒直後の運転はもちろんしない・させないだが、翌日まで体内に残る酒気に、意外に気配りしない人が多いのではないか。

0mlを飲むと、アルコールが抜けるまで2時間強かかる。500mlなら3時間強。飲酒量が増えればその分、抜けるまでに時間がかかる。

ユーハイ5杯を飲めば抜けるのに17時間かかる。つまり夜10時に飲み終えて休んでも、翌日昼間の3時まで抜けない計算だ。体質や体格などで若干の差異はあっても、アルコールが体内から抜けるまで長時間を要することに変わりない。酒気帯びで朝に検査される事案の多くは、これだ。

4月から事業用自動車点呼時にアルコールチェックが義務付けられる。乗務開始時間と、飲酒時間・量によるアルコール抜けの再認識が必要だ。(大)